兵庫教区「法」シリーズ ⑩①

報恩講

西本願寺 太鼓楼

御同朋の社会をめざす運動（実践運動）
兵庫教区委員会

世の中に
最も度（ど）し難（がた）いものは
他人ではない　この私

The most hopeless person in the world to be
saved is not someone else–it is I!

兵庫教区・本願寺神戸別院
親鸞聖人御誕生850年　立教開宗800年

慶讃法要（きょうさんほうよう）

2024年（令和6年）5月16日㊍～19日㊐の4日間

『弥陀たのむ心一つ』

名号は　如来の御名と　思しに　我往生のすがたなりけり
たのませて　たのまれ給う　弥陀なれば　たのむこゝろも　われとおこらず
（蓮如上人自筆和歌『浄土真宗聖典全書』五巻　古語「たのむ」は、現代語の「まかせる・帰する・たよる」の意味）

親鸞聖人は、「生死出づべき道」をお尋ねになり、臨終の来迎をまつのではなく今ここで救われる、お念仏に出遇われました。蓮如上人は、「生死」への問いを「後生の一大事」と言われ、「往生は一人のしのぎなり」と「他力の信心」の道をお示しくださいました。

その正覚すでに成じたまひしすがたこそ、いまの南無阿弥陀仏なりとこころうべし。これすなはちわれらが往生の定まりたる証拠なり。されば他力の信心獲得すといふも、ただこの六字のこころなりと落居すべきものなり。（『御文章』四の八）

〝南無阿弥陀仏〟は、過去でも未来でもなく、今ここに、この私の存在している場所のこの私の上に、「往生の定まりたる証拠」として既に与えられているのです。

お寺やお仏壇のご本尊も、儀礼の発達の中で、名号であったのが、絵像や木像になっていきましたが、私がお浄土に参る証拠がもう届いていることを「おすがた」にしたものなのです。もう届いていることを、よろこびあう場所がお寺の本堂です。

親鸞さまようこそ「ご本願他力」のお念仏に、私をお導きくださいましたと、お徳を讃え、み教えを聞き、ご信心をいただく法要が報恩講です。そこでは、座禅のような「行」をせず、「聞其名号」（其の名号を聞きて）とあるように、阿弥陀さまのお喚び声にお出遇いします。（『信文類』註釈版二一二頁）

「お斎」にしても、椎茸は親鸞さまの網代笠、お揚げはお衣、人参はお手足のあかぎれと、親鸞さまのご苦労への思いが込められています。

報恩講に遇い、ご恩のいっぱいを知り、それに報いる念仏生活を送ることが出来る身を恵まれるのです。人生に起こるさまざまな出来事も、「試練」ではなく、み教えに遇うための「ご催促」と受けとめられます。全国各地で毎年勤められる、他に例をみない報恩講は、浄土真宗の歴史そのものです。

阪神北組稱名寺　浅井佳信